

# キブツ講演・九州の旅

手塚信吉



長崎港

## イスラエルと姉妹

### 都市を結ぶ大山町

畏友、児玉亀太郎さんから、熊本県阿蘇郡蘇陽町大野宮後、世界平和道場において、三日にわたる日本古代文化研究会を開催するが、その最後の日にキブツの講演を計画したから講師として来てくれ、という書面があったのは七月末である。九州まで行って講演一ヶ所では淋しいかと思つていたところ、次の書面で、大分県大山町にも立寄れとのこと、丁度そこに島田昇翁が来訪されて、長崎県庁その他でもキブツ講演をと申出があり、万事好都合、八月十九日羽田発福岡着十二時五分であった。

大山町農協の自動車空港まで出迎えてくれたので距離をきくと、大山町まで五〇キロ以上あろうと言うのでびっくりしたが、坦々たる高速道路、速度が距離を克服して、正に自動車時代を痛感する。途中、至るところ景勝地に高速道路特有の美事なレストランがあり、いづこも同じ大繁昌、味覚までが大都会並である。その美しいレストランで昼食の饗応を受けて大山町に午後二時到着した。

暑い真夏の一ヶ月、東北、北海道、九州と久方ぶりで汗だくのキブツ講演旅行であった。どこに行っても、航空機も列車も、切符入手だけでもヘトヘト。駅でも空港でも、若者イッパイの雑踏ぶり。老人が余計なものに思えて暑さが身にしみた。海外旅行も一大ブーム。本年度の予想人数百五十万人、一人三千ドルまで持ち出し自由、かくて外貨の乱費を政府が奨励。パリでも、ロンドンでも、ローマでも、ドルの乱費は日本のおっさん、嘲笑的大評判という。成り金や道楽息子に、贅沢を覚えさせたら、一生とまらない。国が持て余すのも、そう速い先きではあるまい。もっと目立つのがマイホーム全盛。日本中どの町村でも、戸数増加して人口激減。それを自治体も中央政府も、何とも思つていないらしい。だが、民族崩壊にもつながる重大問題である。

老妻を取られた老父こそ災難である。炊事洗濯、拭き掃除、六十の手習いで永続しないう。マイホームの犠牲で男やもめが何十万人不自然な生活からは不自然な性混乱もおこりがち。それを奨励しているのが、下情に暗い成金政治家である。一心同体、夫婦二人が水入らずの生活。それは確かに魅力であるが、その為には社会生活そのものの改革が前提となる。人類は共同体なり。仲良く暮せば大勢ほど安全で便利で幸福である。夫婦単位の幸福は人生の一部分にすぎない。親にしろ、子にしろ、他を犠牲にした己れの幸せが永続するはずがない。皆んなが幸せて、自分たち夫婦も最高の幸福を万喫しているのが、キブツ共同体社会である。なせもつと真剣に考えないのであろう。

## 巻頭言

手塚信吉

キブツに神経衰弱も不眠症もないという。それは「人類は共同体なり」という真理に忠実だからである。その安定したキブツの中で、家族は必ず夫婦二人、老両親も同じ夫婦二人。もし、独身になれば老人住宅に入居するが、そこにはお世話係が四人に一人は奉仕している。子供が生まれて一週間後に保育所入りして専門の保育母さんが安全保育。幼児舎、小学、中学、高等学校と、それぞれ子供は子供の家で共同生活、保育係も教師も至れり尽せりて不安はない。「日本の皇室並か」両親はもちろん、我が子に会うことも家庭に連れ帰ることも自由であるが、午後九時からは子供の家の保育係に一任する。その後は必ず夫婦二人の万年新婚気分、老両親も同じこと、別居といつても隣同志淋しさも不便も全くない。個人義主社会と違って利害関係のわだかまりが絶無であるから、嘘の無い生活、人間愛の交際ができる。正に夫婦天国そのものであろう。今年も当協会主催のキブツ研修生には女性が多断多い。人生最高の幸福は夫婦愛から出発する。そののできる基礎づくり、それがキブツ社会を真似ることであらう。



大山町庁にて

大山町を訪れたのは最初であるが、八幡名町長兼農協組合長は、あまりにも有名であり、キブツ運動を通じて五、六年前から知遇を得ており、当協会の会員でもある。何事も有言実行主義の八幡さんは、すでに二十年前、山村に適した農業政策を断行し、梅と栗との共同栽培を奨励し、近代化耕作不能の山田や植

林の空地を利用し、今年年産一億円を突破する収入をあげているという。

良いことは何でも実行する八幡さんは、イスラエルのキブツにも着目し、自ら現地を視察して年々実習生を送ったり、キブツの青年を迎えて、労働の美風を村の刺激剤にしたり、今はイスラエル国メギドウ町と姉妹都市となり、国際親善の実を示す民間大使でもある。そして、昨年から万年町長の名を返上して専ら農協組合長として、産業発展に全力を投入し、山村農民に適した副業の奨励に懸命である。

その八幡さん自ら運転する新型自動車町内くまなく案内されたが、筑後川の上流で、豊かな杉林の美観が無言の中に富有を示している。その上に水も漏らさぬ適作適業、みんなて考え、みんなて話し合い、みんなて工夫するから実行が伴う。町全体が生々と希望に生きていくのが直感でも判る。

それにしても大山町は美しい、澄みきった甘い空気。筑後川の清流。森林の緑。調和した農家の建物。特に安定感のある草ぶき屋根の旧農家。正に住み良い町。夢多き町であるが、農業近代化にはあまりにも箱庭的である。産業指導者の苦心もそこにあるであろう。

建設省事業の大規模な多目的ハイダムが、溪谷美を一変せしめたが、それはそれで一層雄大な景観である。永久洪水克服が何より有難いであろう。その上流に有名な枝立温泉がある。長崎市から迎えに来られた島田昇氏と共に、夕刻、同温泉境で八幡組合長他有志十数名が歓迎宴を開催してくれ、感激と恐縮に包まれながら、永久に忘れぬ思い出もなつた。

そして、翌二十日午前十時から、全国にも珍しい総合庁舎、町役場と農協と同居する美事さに、またイスラエルのモシャブ・シトファイを思い出しながら講演会場も共同使用の会堂であった。

八幡組合長の名挨拶について、私のキブツ講演一時間半、キブツの話も当町では釈迦に説法で少々勝手が違つてはいるが、同志的な好感を味わい得た思い出であった。

講演終つて昼食後、午後一時三十分、また八幡組合長自ら運転する自動車で、阿蘇の平和道場に向う。道は意外に遠い悪路三時間の運転、八幡さんの疲労が察せられて、恐縮であった。夕日が地平線に近づくころ、正に展望雄大、太古を思わせるような景観を独占して建つた平和道場に到着したのであった。阿蘇の外輪山の外側にあたり、殆んど無人

の高原、一望千里人家をみる事ができない。誰がみても、牧場適地を思わせる絶好条件を備えており、キブツ講演を求めた理由も忽ち理解することができた。すなわち、草木繁茂するネゲブであった。

翌二十一日、田辺講師の阿蘇の古代文化財の講義後、十時三十分から持時間一時間の新しき生活協同体と題したキブツ講演を引受けたが、結局、正午近くまで話してしまつた。舌足らずにおわつた感があつたが、その後を八幡さんが立つて「わが町の建設」と題してキブツに関連ある話を一時間雄弁をふるつたが、やはり時間不足でもつたない感があつた。

阿蘇高原とキブツ村、正に日本唯一の最遠地である。誰の事業でもよい、搾取や不勞所得で汚さない、青年の時代感覚に合致する理想の新天地を切望するものである。児玉大兄の意図が直感されて嬉しかった。

そして、はからずも天下一家の内村健一さんという人物に邂逅した。こんな人物が九三日間も、こんな道場に衆と共に生活し、謙虚に研修する態度に少々びっくりにしたのであつた。一時、新聞雑誌で悪名高く批判され、脱税額日本一と称せられた天下一家の会、その



阿蘇の天下一家平和道場にて

発案者であり、会長である内村健一さん。年も若い四十八才、一見信念に生きる大丈夫、目のあたりにして世評とはあまりにも異なる正義の人物、些か亜然たる思いであつた。

### 天下一家の会は

#### 庶民の助け合い

国が公認している競馬競輪、宝くじ、土地や株式の思惑等々、何でも誰かが損して誰か

が儲ける。しかも、一人が大儲けする為には万人が必ず泣きを見る。その為には一家心中が出る。離婚沙汰が起きる。幾万人の喜悲劇が繰返えされているが、天下一家の会では皆んなが得するだけで誰一人損する人はない。

法人対象にスタートした六十万円の中小企業経済協力は、六十万円の元金は仮払いであり、やがて送られて来る三千三百万円の金は仮受けであるから税金は一銭もかからない。元々営利が目的でないから、税法上の違反もない。法の盲点を突いた妙案でもない。根本精神が弱い庶民の助け合いにある。強い者勝ちの資本主義経済から、弱い庶民が免れる神の道かも知れない。

僅か数時間の説明であつたから、明確な納得は出来なかつたが、内村健一さんの私生活を知り、一家の円満さを見せ付けられて、これは本物だぞと直感せざるを得なかつた。

こんな儲け仕事は必ず真似る人があらわれ。だが、真似して成功した人が無い。問題の本質はそこにありそう。二宮尊徳先生は経済原理をタライの水にたとえている。さあどうぞさあどうぞと両手を向うに押しやれば、必ず両側から戻つて来るが、反対に我が方へ我が方へとかき寄せると必ず両側から



住宅公社講堂にて

逃げてしまふ。経済原理も同じだと。

尊徳先生はそれを説いただけではない。実践しており、今日で言う億万長者にもなっていた。逃げてでも逃げて切れないうち億万長者となった尊徳翁であった。内村会長もそんな人物であろう。その集まって来る金を生かして社会事業に投じ、生産事業に投じ、ぐるぐる廻りをさせるほど、貨幣の価値が高まるのである。その原理を実践しているのだ。

神様と悪魔との両面を備えている金銭を扱う仕事で誘惑に負けない為の強い信仰心をお

持ちの内村さんに敬服する。これから十年間ご本人は勿論のこと、家族からも幹部の方々からも、私心私欲に惑わされず、無事に運営されたら、それこそ本当の天下一家が具現するであろう。真面目に健全に衆人の助け合い機関として発展せんことを心から祈るものである。

## 長崎の農政課に招かれて

兎玉、西村ご兩人に見送られて長洲港から熊本県に別れを告げ、島原半島島原港着、そこには県の農政課の松藤さんが出迎えてくれ、遠廻りして練早の干拓地帯を視察して、昼食後、長崎市入りが午後一時半であった。

三十五年振りである原爆後の長崎、出島も丸山も面影はない。市街の容相一変して、香港かシンガポールを思わせる。起伏の多い地形が近代都市化に一層の美観を加えたが、観光都市化に安眠を貧るなかれ。長崎県上海市の昔の意気を是非回復されたい。その四十万都市長崎見物の寸暇もなく、少々残念であった。

二十二日午後一時半、長崎県庁舎に副知事以下関係部課に挨拶の後、住宅供給公社に松

本専務理事を尋ね、対談数刻、午後三時より同公社講堂においてキブツ講演一時間三十分。終って午後五時三十分より、同公社幹部十数名と共に会食となり、会談二時間、宿舎虎屋ホテルに案内されたのは午後七時半であった。

二十三日午前中は農政課の若手の方々と対談の予定であったが、何かの都合で月刊キブツ二月号に紹介された、所謂、長崎共同体を訪れることになった。代表者であり主婦でもある藤田満寿子さんに承ると、当協会の関係者は岸田夫妻をはじめ数人の人々が訪れたり、滞在したり、縁故の深い関係でもあった。二人の子息と一人の青年を加えて、それに島田老人も参加して、雑談数時、昼食の饗応を受けて、辞去したのは午後一時であった。往復共にご令息の巧みな運転で迎送され、恐縮であった。

そして、午後二時から塩飽副知事主催のキブツ講演会開催、農政部中心の方々も承ったので、大要別項の如く『キブツと日本農業』と題して、二時間たっぷり講演であり、質疑応答十分、可成り熱心に耳を傾けていたことは壇上からも知ることができた。